

## 「特別講和」

原題 「とくべつこうわ」

原文はB5版13ページ。

以下、原文をそのままA4版に変換し、欄外にページを付与したもの

学校から依頼されたのは、統率に関する講話ということであるが、海軍大学校の昔から、名統率者といわれる人は統率について語らず、滔々と統率を論ずる人にろくな統率者はいないといわれており、もし私の話が面白ければ、私はろくでもない統率者であったということに通じるし、面白くなければ諸君はすやすやとお休みになって学校の委託に背くということになるので、私としてはこの矛盾に苦しむ次第である。

それはともかく、統率というものは全人格の発露であり、神と悪魔の間を往復しているといわれる人間、複雑で矛盾に満ちたこの人間を取り扱うものであるから、自分自身を含めて、人間というものを実践の場で総合的に理解し、その理解の上に立って統率のあり方を考えるということが肝要と思うのである。そこで、そのためには、自分自身の経験と反省、身近な上司や同僚の実際の統率、一中には反面教師もいるかもしれない—を通じて生きた教訓を身につけるとともに、平時では経験できない有事の統率については、戦史を学んで先人の実践の跡を辿り、その成敗利鈍から教訓を学んで、自らの心構えに資し、修練に励むのが、もっとも大切な一つの方法ではないかと思う。

みなさん自身も今までの自衛隊勤務を通じて、あのような上司になりたいと思う指揮官に仕えたこともあれば、俺はああいうことはやらんぞと思わせられた指揮官に接したこともあるだらう。こういった貴重な経験をよく咀嚼して自分を養う肥やしにしてもらいたいものである。

また、戦史というのは血の通った人間の出来事を記録したものである。いくら科学技術が進歩しても、人間性そのものは何千年も変わらない以上、先人の実践の跡は汲めども尽きぬ教訓の宝庫である。

Liddell Hart "Why don't we learn from history"

○ Awareness of our limitation should make us charity of condemning those who made mistakes, but we condemn ourselves if we fail to recognize mistakes.

(人は神ではないことを認識して、間違いをした人に対しては寛容であるべきだが、我々自身はその間違いからしっかり学ばねばならない)

○ Fools say that they learn by experience. I prefer to learn by other people's experience.-----The study of history offers us that opportunity. It is universal experience ---infinitely longer, wider and more varied than any individual's experience.

(自分の経験から学ぶというのは愚者、他人の経験から学ぶべし。歴史を学ぶことによってその機会を得る。歴史はいかなる個人の経験より遙かに長く、広く、変化に富んだ経験だ。)

私も海軍から海上自衛隊を通じて多くの上司に仕え、数多くの教訓を学んできた。もともと海軍に全く縁の無かった私が海軍に入ったのは、ほんの偶然の機会からであったが、敗戦を挟んだ今日に至るまで、海軍に入ったのを一度も後悔せずにすんだことは、幸せという他はない。それにはいろいろの要素があろうが、最大のものは、海軍と海上自衛隊のいずれでも、正しいと信じることを遠慮なくいえる素晴らしい隊風の中で勤務し生活できたこと、敬愛しあうようになりたいと思う上司に仕え、心の通じ合う同僚や部下とともに一つの目標に向かって全力投球できたことなどが主なもののように思う。勿論例外がなかったわけではなくて、海軍のとき、こんな人がおるようであれば海軍を辞めようかと思わせられた艦長に仕えたこともある。しかしこれも後になれば得難い反面教師として、自分の良い戒めとなった。

そこで今日はいずれも立派な上司の中でも、このような人に親しく仕える機会に恵まれたことは一生の幸せと思う三人の方について、私から見た風格の一端をお話ししご参考に供したいと思う。断って置くが、話はどこまでも私の接した範囲で、私の感じたところ、それも一部分に過ぎない。とても全貌を語るものでないことは、勿論である。

最初にお話しするのは、諸君もよく知っている内田一臣海幕長についてである。内田さんの名を初めて知ったのは兵学校の生徒のときである。私が二年生のとき支那事変が始まった。海軍の関係では渡洋爆撃を含む航空戦、激しい上海の陸戦、逆行作戦などに若い血を沸かしたものであった。それは決して人ごとではなかった。四年先輩の内田さんのクラスでは多くの人が小隊長として戦闘に参加された。私どもと入れ替わりに兵学校を出ていかれたので、三年、四年の人たちにとってはよく知った間柄であり、戦死された方のうわさ話など私どもにまでよく聞こえてきた。卒業したら部下を持つ、その部下を率いて自分は立派に任務を果たし恥ずかしくない戦死ができるか、それは目の前に与えられた深刻な課題であった。

上海の戦闘が一段落した頃、大隊長や中隊長あるいは駆逐艦長として戦闘に参加された方方が、兵学校の教官として着任された。当時はそれら教官が自分の戦闘経験を、適時全生徒を集めて話すのが慣例であり、私どもは、全身の注意を集中して聞き入ったものであった。

それらの講話の一つで内田さんの存在を知ったわけである。その要旨は次のようなものであった。「内田少尉は、平素は物静かな部下を大きな声で叱ることもない大人しい人で、こんな人が戦闘できるかと思っていたが、いざふたを開けてみるともともと勇敢に任務を完遂したのは内田少尉であった。平時に大言壮語する人よりは、黙々と誠実に自分の任務を果たす人が、いざというとき本当に頼りになるものだ」

六十年以上前の話であるが、前に申した問題意識との関連もあり、今日まで覚えているほど印象深く聞いたことであった。後で知ったことであるが、この戦闘で内田さんは機銃小隊を率いて敵師団司令部を殲滅し金鵄勲章をもらわれた。なおご自身の回想は「波濤」(142号)(平成11年5月)に載っており、戦場心理を知るのによい資料であるので、まだ見ていない人があれば、是非熟読を勧めたい。

私が内田さんに親しく仕えたのは、海幕の課長のときの直属部長、部長のときの海幕長としてである。いずれの場合も、仕事は大幅に任され細かい介入は全くされなかった。それだけに

私としては、できるだけ報告につとめ、意図に背くことのないよう注意した。任されはしたが、それは決してやりっぱなしではなかった。ちょうど艦長が操艦を航海長や当直士官に任せる場合と同じように、自分の技量が上がるほど任せる範囲は広がる。それは、必要に応じ自ら收拾できる範囲に応じるものであるからである。内田さんは黙って私のやることを見守っておられ、私のレベルでは行き詰まったとき、あとは私がやりましようご自分のレベルで解決を図られた。その折衝や調整に当たっては、決して大きな声を出したり、芝居がかったやり方はされず、静かに淡々と説かれるだけであるが、その静かな話のなかに全人格の重みがあり、説得力には感嘆する外はなかった。

若干の例を話してみよう。雫石事件のあとマスコミが民間機と自衛隊機の近接に神経をとがらしていたころ、ある民航機が、小月の自衛隊機にニアミスをしたと報告した。小月の方では、全くニアミスとは考えず、当のパイロットもなにも報告しないまま帰宅してしまった。土曜日のことである。携帯電話全盛の今日では想像もつかないが、当時小月基地には、一般の電話が一本入っているだけで専用電話はなく、海幕との通話もこの一般電話を使う外はなかった。マスコミからニアミスの状況を聞かれた海幕の担当課では、すぐ小月に連絡をとり、パイロットを呼び返して状況を報告するよう指示した。やがてマスコミ側は、海幕長の記者会見を要求し、相当な余裕を見て時間が設定された。ところが、待てど暮らせど小月の報告がこない。こちらから何度電話をしても話し中でどうにもならない。後で聞いたところでは、全国のマスコミから問い合わせが集中して電話の空くときがなかったという。相当余裕があると思った記者会見の時間は迫ってくるが、状況はさっぱり分からない。私は海幕長に対し責任を感じたがどうしようもない。一言も催促されなかった内田さんは、時間になると資料のいっさい無いまま記者会見に臨まれた。そして、まだ詳しい状況は分からないが、報告のない以上、いわれるようなニアミスはなかったと思う、私は部下を信頼する、という趣旨の話をしてことなく終わった。ことなくすんだのは、一に平素から培われた内田さんに対する記者諸君の信頼と尊敬の現れであったが、私は申し訳なさとともに、資料を与えられないまま会見に臨まれた内田さんの度胸と、部下の至らなさを一切自分自身に引きかぶられた姿勢に深い感銘を受けたのである。

私の失敗はまだある。当時のアメリカのCNOズームアルト提督が忙しい日程を割いて短時間横田基地に立ち寄られ、内田さんと会談されることになった。月曜日の朝早い時間である。私は内田さんのご意向を伺ってAGENDAと必要な資料を準備し、土曜日に自宅に持ち帰り当日早朝公用車で横田に向かった。途中念のために持参した書類を調べると、前夜確かに入れたはずの肝心のものがない。すぐ反転して自宅にあった書類を持って急行したが、着いたときは大幅に時間に遅れ、両者の会談は既に終わりに近づいていた。急遽書類をお渡したがそれを使われる暇もなく、会見は終わった。後で大変恐縮してお詫びしたとき、内田さんは計画の通りやっておいたといわれただけであり、それだけ一層申し訳なく感ずるとともに、内田さんの人間と識量の大きさに感銘したことであった。

内田さんは、もの静かでいわゆるハートナイス、人に頼まれると大抵のことは断られない。その外面の下には燃えるような闘志を秘め、芯はきわめて厳しく、これはということには驚くような粘りを発揮された。当時第四次防衛力整備計画の策定中で、海幕としては、一番整備の遅れている海上兵力の充実を優先すべきだと強調し、特に機能が脱落している対潜掃討兵力の

創設を最重点に全力を挙げて努力した。計画がだんだん煮詰まり、経費枠が絞られてくると、新しく芽を出そうとするこの兵力が内局や大蔵省の削減の対象になり、抵抗する海幕との間で厳しい折衝が続いた。とうとう最終的に長官（中曾根）の前で次官、防衛局長、海幕長、防衛部長が意見を述べて結論を出すことになった。最後まで粘られた内田さんは、結局対潜掃討機能の必要性は認めること、実質的にこの作戦のできる兵力を整備すること、五次防では正式に編成することの三つを条件として、覚え書きを作成した上で下りにことに決断された。これらの経緯を通じて、明確で揺るがぬ意志を示して部下を指導すること、全般情勢上どうしてもやむを得ないときには、将来に含みを残すよう最後まで努力することなどを学んだことであった。

余談ながら一つ付け加えておきたい。歴史学者のE. H. カーは「歴史とは何か」という本の中で「日記を含む会談の記録は、何が起こったかを語っているのではなくて、書いた人が起こったと考えていたこと、彼が他人に起こったと考えてもらいたいこと、恐らくは起こったと彼が考えたかったことを語るに過ぎない」という意味のことを述べている。戦史を研究していて、同じ会談に出席した人の記録や日誌が食い違って真相はどうかという疑問が起こるのは珍しくない。このカーの本を読んで成る程そういうことであったかと納得したことであった。日常業務でも同じである。せつかく約束したつもりでも相手も同じように了解しているとは限らない。長官の前のこの会談でも、翌日覚え書きを作って防衛局長に捺印を求めたところ、一部についてそういう話ではなかったともめた記憶がある。諸君がこれから重要な問題で将来に影響するような折衝をした場合は、できればその場で、遅くも次の日には、メモでも良いから要点について双方の了解した捺印かサインを残すことを勧めたい。

話を元に戻して、内田さんから一見冷たいような印象を感じる人もあったようであるが、それはもともと地味で目に立つようなことは好まれない上、私にいわせれば照れ屋の一面があるためと思う。身近に仕えれば仕えるほど、目立たないようにそれとなく示される、噛めば噛むほど味のあるいぶし銀のような深い情けを感じたことであった。内田さんが人事課長当時募集班長であった山元さんが、広島地連部長を最後に退職願いを提出されたとき、当時護衛艦隊司令官であった内田さんが呉入港時わざわざ広島地連まで私服で出かかけられ、就職の経緯を聞かれて納得されたことがあったが、山元さんは「自衛隊最後のときまで示された愛情には涙を禁じ得なかった」と書いている。このような話は決して少なくなかった。以上意を尽くしたとは思わないが、内田さんの風格と統率の一端を学んでいただければ幸せである。

次に紹介したいのは板谷隆一統幕議長である。板谷さんは、支那事変のはじめ大山事件として有名な大山中尉が殺された後を承け、上海特別陸戦隊第一中隊長としてよく苦戦に耐えて陣地を守り抜き、居留民保護の任務を完遂して金鵄勲章を授与された。大東亜戦争では軽巡の砲術長の後、水雷戦隊の参謀としてこれも有名な髭の木村昌福司令官等に仕え、北方作戦ついでレイテ突入、増援輸送、ミンドロ突入、大和特攻など悪戦苦闘、九死に一生を得て、海軍総隊参謀として終戦を迎えられた。私は、海軍時代はお名前を聞くだけでお仕えしたことはなかったが、海上自衛隊では第二幕僚監部警備課の先任部員と平部員の関係から始まり、統幕議長と五室長で終わるまで、たびたびお仕えする幸せに恵まれた。中でも、司令と艦長の関係で一年間同じ艦で寝食をともにしたことは、忘れられない思い出である。この間数多くの学ぶことがあった。板谷さんの第一の特徴は明るいことである。ユーモアに富み傍にいてだけで明るくなる雰囲気を持っておられた。板谷さんご自身は「ユーモアのセンスというものは、統率者に

とって絶対欠くことのできないものとまでは言い切れないが、もしそういうものがあるとしたら、部下に非常な親近感を覚えさせまた雰囲気を明朗にして、持っている他の資質に一段の光彩を与えることになろう」といっておられる。板谷司令のとき艦長の私が士官室に入っていくと、集まっていた幹部が一人去り、二人去り、気がつくとも誰もいない、ところが司令がこられるといつの間にか沢山集まってくる、といったことに気がついた。ユーモアだけでなく雑談の話題も豊富で、司令のおかげで士官室の空気が楽しく本当に有り難かった。こういったことは、天性とっていたが、それだけでなく人知れぬ努力の賜物であった。

板谷さんから伺ったことがある。「終戦後、仕事もろくなものがなく加えて奥様が胸を患われ、家庭が大変暗くなったとき、一日に一つづつ冗談を言い合って笑おうという約束を奥様とした。苦しいとき一つでも冗談を思いつくのは決して楽ではなかったが、何とか実行したことが後々役に立った。冗談は奥様の方が上手であった」という話である。その例に次のような話をされた。「官舎のトイレは古いので、たびたび壊れて修理している。」おい、またトイレが壊れたぞ”家内曰く”使い方がテアライののでしょうか」これはご本人の話ではなく、統幕議長のとき随行した副官から聞いた話である。大阪で万博があり議長はある国の招待を受けご夫妻で出席された。当時の阪神基地隊司令は私の二年先輩の関清英さんで、車を用意して新大阪駅まで迎えにでる打ち合わせであった。ところが予定通り新幹線で駅についても、関司令の姿が見えない。しばらく待った後やっと関さんが息せききって現れた。交通渋滞のため遅れたのであった。恐縮してお詫びされる関さんに、後ろから奥様がいわれた。「昔から関の五本松というではありませんか、少しもご心配はいりません」おそらく関さんは、この言葉でどんなにか救われた思いをしたことであろう。これも人心の機微をつく統率の妙である。

雑談についても、狭い艦内生活の中に面白い雑談のできる人があったとしたら、どれほど助かるか分からないとして、それには日頃から知識見聞を広める努力が必要であり、これは面白いなと思った話や事柄はノートに書き留め、何かのときに思い出して利用したり、その場にマッチした雑談の種にしてきた、と話されたことがある。傍にいただけで楽しい板谷さんの雰囲気も、人知れぬ平素の努力の賜物と感銘したことであった。

このように明るく楽しい板谷さんも、その芯はきわめて厳しく、任務や規律に関しては一切妥協されなかった。私が艦長るとき、司令から言葉は穏やかであったが、ぴしりと叱られたことは今でも忘れられない。一つは艦隊の訓練で、私の艦は仮想船団に指定された。訓練開始は総員起床の一時間前、朝食後出港の計画になっていた。船団ということで、訓練開始になっても私はのんびり寝ていたが、当直士官が飛んできて司令が呼びですという。何事ならんと飛び起きて艦橋にいくと司令から灯火管制をやれと叱られた。司令は訓練開始に備えて起き出され、灯火管制ができていないので当直に注意したところ、らちがあかないので私を起こされたのであった。艦隊の訓練も半ばを過ぎ、気の緩むころである。私自身が戒めなければならない艦内の緊張の緩みを察知され、指摘されたことに気がつき、深く反省した次第である。

もう一つはサービス事故を起こしたある人の処分について、厳しく戒めるが将来に影響しないよう配慮したところ、「腐ったリンゴは取り除け」というご指導をいただいたことがあり、当面のことだけでなく海上自衛隊の将来をいつも考えておられることに感銘した。

先に紹介したように板谷さんはたびたび死生の境を出入しておられるので、一度戦争中の心構えについて伺ったことがある。板谷さんは、生徒の頃から死生問題に悩んだこと、結局親鸞

の教えに解決を求めたこと、諦めてしまえば心も落ち着いて冷静に状況を判断し最善の処置を執れるが、その諦めることがなかなかむつかしいこと、などを話された。

その後私は自分で考えて、諦めるということは、仏教で言う空の世界に帰一するのではないかと思うようになった。

最後に板谷さんから示された指揮官の心得を紹介して、ここの話を終わりたい。私は護衛隊司令を命じられたとき、当時護衛艦隊司令官であった板谷さんを訪ねて、司令の心構えを書いていただくようお願いした。暫くして送っていただいたのが次のものであり、司令のときだけでなく、在職中座右において戒めとした。

1. 部隊の性格は即指揮官の性格、悪ければ自分の及ばざるを思え
2. 気がついたら遠慮なく言え、また言える雰囲気を作れ
3. 指揮官は尊敬を受けるべきもの、但しそれは指揮官の責任に対するものであって個人に対するものと思うな

次に紹介するのはこの人の部下として戦った吉川潔艦長のことである。

個人的勇怯に拘わらず、与えられた任務と責任を完遂すべく最後まで努力を尽くすということは、海軍の伝統と言っても良いと思う。少なくともそれは私の見聞した限り将兵の共通した現象であった。このことは格別やかましく教育されたというよりは、海軍で生活し勤務している間に当たり前のこととして何時しか自然に身に付いたものであって、いわば隊風の浸透的効果によるものと思われる。

しかし小なりといえども、部隊の指揮官としてある程度裁量の余地を持ち、自らの判断と意志によって任務を遂行する立場ともなれば、任務を果たし責任を尽くすということも決して単純でなく、人によって顕著な差のあることを実戦の場面で感得し深刻な教訓を得たことであった。

その中でも戦死後二階級特進して少将になられた吉川艦長に身近に仕え、戦闘指揮官とはかくあるべきものという生きた模範に接したことは、生涯を通じる最高の幸せであった。艦長として仰いだ期間は半年に満たなかったが、激闘の日々を通じ身をもって示された無言の教訓は千言万語に優る重みがあった。

吉川艦長が戦闘に当たりすさまじい気迫と闘志を持ち、積極果敢もつとも勇猛であったことはいうまでもない。その戦ぶりは後ほど当時航海長後砲術長であった椛島さんの残っている日記から紹介しよう。ここでまず言いたいのは吉川艦長がただ勇猛であっただけではないということである。艦長は、どんな状況であっても、冷静沈着、戦機を看破し、たとえ身を犠牲にしても大局から見て友軍全般の戦闘に寄与するよう常に配慮された。その例を少し話してみよう。

ガダルカナル作戦の初期、敵が飛行場を使い始め、奪回を計る我が軍は船団輸送に失敗し、駆逐艦を以て陸軍を運び込むしかないことになり、急遽ラボール次いでショートランドに進出した私の乗艦駆逐艦夕立もその渦中に投げ込まれることになった。昭和17年8月下旬のことである。その駆逐艦輸送も、最初の一木支隊先遣隊の輸送は成功したが、後続部隊の輸送は敵機の攻撃を受け、被害を出したり、途中で諦めたりして失敗していた。艦内の空気をよく示すものでもあるので、まず最初の輸送時の椛島日記を読んでみる。

(8月29—30—31日日記)

○ 次が第二回の輸送時の日記、吉川艦長の真骨頂を示す戦いである。

(9月4日日記)

- ・陸軍支援 . 泊地掃討を命じられても実行しない友隊の状況を知って、自ら積極的に上級指揮官の意図に沿うよう行動 . 翌朝の空襲の危険を避けて戦果の徹底的追求

○ 次は「由良」救援時の行動

(10月25日日記)

○ 第三次ソロモン海戦

(11月12日日記)

- ・敵の意表をつく行動 . 近接好機に投ずる雷撃 . 最後まで諦めない闘志
- ・総員離艦時の処置

以上話したところから、吉川艦長の戦闘ぶりとともに、与えられた当面の任務をどうにか果たすだけに満足されず、さらに積極的に全部隊の作戦に寄与することを考えておられたことが分かっていただけたと思う。艦長の任務に対する態度は真剣かつ深刻であった。少ない兵力を酷使して無理な犠牲の多い作戦を遂行せざるを得ない上級指揮官の意図に合致した積極的行動をとられたのである。

この当時無理な作戦も多かっただけ、私ども口さがない生意気盛りの若い連中は、上級司令部に対する無責任な放言をすることも多かったが、吉川艦長が一言半句でも批判がましい口をきかれたのは、聞いたことがない。前任の某艦長は若い者の批判に共鳴するだけでなく自ら不満を高言することも多く、艦橋ではそのような論議が盛んであった。吉川艦長が着任後も私どもはそれまでの調子で批判を続けていたが、艦長はさっぱり乗ってこられない。やがて私どもも気がついて、艦橋や部下の前で批判がましいことは慎むようになった。

艦長はまた大言壮語されることは全くなかった。肩肘張らず淡々としてやるべきことをやるという態度であって、どんな見事な戦闘をやられ、戦果を挙げてもその功を誇られたことは一度もなかった。夕立に着任されたのはミッドウエーに向け出撃する直前であって、それまでは駆逐艦大潮の艦長として大活躍され、特にバリ島沖の海戦では、殊勲を挙げて連合艦隊から感状を貰われたのであったが、その話はずいぶん承ることがなかった。前任艦長が支那事変で揚子江の遡行作戦に参加し、鼻高々で一人で戦をしたような自慢話に明け暮れていたのとは、良い対照であった。

艦長は訓練には厳しかった。特に自分自身を徹底的に磨かれた。激闘の日々訓練だけに割く時間は全くない。夜戦の直後でも、長期の行動が続いてどんなに疲労しているときでも、航泊を問わず、黎明と薄暮には、艦長は総員を戦闘配置につけ警戒を厳重にするとともに、状況許す限り真剣な訓練を行われた。そしてその都度必ず自ら戦闘号令を下し、砲戦、魚雷戦、対空戦闘、対潜戦闘などが、自分の意図の通り行われるまで止められなかった。戦闘に当たり艦長は、闇夜の中で、あるいは群がる敵機に対し、敵情を即座に判断され、操艦を指示しかつ流れるように口をついて出る戦闘号令を以て、まことに適確な戦闘指揮を行われたが、これこそまさに毎日のたゆまぬ自己修練の賜物ではなかったか。艦長はおそらく毎日自ら各種各様の状況を頭の中に想定しつつ、戦闘訓練を指揮しておられたのであろう。ひとしきりその訓練を行われ、意図の通り動くことを確認した後、各部訓練として各科長に任されたが、決しておざなり

は許されず、一日として倦むことはなかった。前任艦長も黎明薄暮の訓練は励行されたが、自ら戦闘号令をかけることはなく、配置よろしいとの報告を聞くとすぐ各部訓練はじめを命じられた。その為ともいえようか、スラバヤ沖の海戦では、的確な戦闘号令がでず、砲術長、水雷長が自分で判断して戦闘を行ったことと良い対照であった。

任務の遂行と訓練に厳しい艦長も、仕事を離れてくつろぐときには本当によい親父であった。戦闘時の勇猛さが嘘のように思われる温厚さ、明るく部下思いで率直、カミシモを着ることは全くなく、艦長の傍におれば春風が吹き、笑いが湧いた。この艦長と一緒にいれば、地獄の果てまでもと思ったのは、私一人ではなく、乗員全部の気持ちであった。

ソロモン激闘の三ヶ月、ガダルカナル突入18回、うだる暑さ、絶え間のない空襲下緊張と不眠の連続、燃える僚艦、沈む輸送船、満載の陸兵、人も艦も良く続くものだと自ら驚くギリギリの限界を超えて今日も繰り返される戦闘と輸送、わづかに慰めてくれるものは南海の素晴らしい黄昏の空と夜の澄み切った星空、私ども若い者でもこの間8キロも体重の減った中でもっとも緊張の続く艦長の疲れた顔を見たことがない。時たま狭い休憩室のソファで仮眠されるだけの艦長は、いつも元気一杯明るい顔で指揮を続けられた。そして乗員一同はこの艦長の下、どんなに行動が続いても、寝る時間がなくとも、暗さは一つもなく、士気は旺盛、闘魂は火と燃えて、が島を奪回せずに置くものかという意気込みに溢れていた。「夕立」は敵を見れば必ず戦い、戦えば必ず勝ち、至難な任務も完遂する艦、絶対に沈まぬ艦という自信と誇りは、上下の一つになった心の交流とともにその明るさの根元であり、艦長に対する信頼と敬愛は無限であった。

その例として、一人の電信員の日記と軍医中尉の回想を紹介して話と終わろう。

(宍戸日記) (永井回想)